

発行 マルクス主義同志会
 発行所 全国社研社
 TEL・FAX 03(3971)0622
<http://www.mcg-j.org/>
 webmaster@mcg-j.org

海つばめ

労働者の階級的立場を固守り抜こう！
 社会主義とマルクス主義の旗を高く掲げよう！
 労働者の階級的立場を固守り抜こう！

定期購読料 半年分2700円、1年分5400円

—— 嵐よ！ 嵐はもうすぐやってくる！
 大胆不敵な海つばめは、たけり狂っている海のうえを、
 稲妻のあいだをぬって飛びかけりながら、高らかにうたう。
 そして、この勝利の予言者は叫ぶのだ。
 —— 嵐よ！ 強く強く吹きあれろ！ ……
 （『海つばめの歌』ゴーリキー作）



目次

- 【一面トップ】麻生助ける小沢の居座り——小沢の金権犯罪は明らか——民主は千葉県知事選の責任を取れ
- 【主張】教育をゆがめる者たち——幼・小一貫“教育”の荒誕
- 【一面サブ】危機の中で活動の活性化誓う——同志会第七回大会開かる
- 【一面サブ】“完敗”した春闘——“非正規”切り捨てた連合ダラ幹
- 【一面連載／多喜ことその時代——没後 76 周年に寄せて(6)】その生涯と作品(4)——「大河のような作品を書きたい」
- 【草枕】年々歳々花相異
- 【コラム】飛耳長目
- 【二面トップ】二度目は茶番——緑のニューディールの幻想——国家破産の中で歳出を膨張
- 【いま労働者は——各地からの報告】愛媛／タダ働きの外国人研修生——女工哀史の再来
- 【三面トップ】危機深める世界資本主義——活動の中で階級的闘いを貫徹しよう——同志会第七回大会・情勢についての報告
- 【四面トップ】右翼ポピュリストの面目躍如——橋下の「大阪改革」
- 【四面書架】吉見俊哉著『ポスト戦後社会』——現代社会の閉塞状況描く
- 【四面連載小説／天の火もがも(21)——林 紘義】二、行方も知らぬ恋の道かな⑩

●見本につき【一面トップ】と【主張】以外の記事は省略させていただきます。

【一面トップ】

麻生助ける小沢の居座り
 小沢の金権犯罪は明らか
 民主は千葉県知事選の責任を取れ

千葉県知事選挙は、政治的賭博師、詐欺師であり、“権力”だけがほしい与太者、やくざ者にすぎない森田が、民主党系の候補者を圧倒的な差で破ったが、その責任はあげて小沢と鳩山に、そして民主党そのものにある。今や、総選挙でも、自民党と麻生内閣が勝って居座りを続ける可能性さえ生じている。民主党が勝っても、つまらない、そして害悪でさえあり得る、もう一つのブルジョア政治が続くかもしれないからといって、最低極悪の麻生内閣が居座っていいわけではない。今や、小沢民主党は麻生内閣を助ける、最も有害な、そして最も反動的な存在と化したのである。

小沢は秘書が事実上の金権腐敗の罪で逮捕されたにもかかわらず、自分はどんな“不正”もしていない、「西松建設からの献金であるのは知らなかった」、秘書の逮捕は単なる「形式犯」による不当なものであり、「国策捜査」である、と言い張ってやまない。

しかし総額三億円もの献金の背後に、西松建設がいるのを知らなかった、などという小沢の弁明が、余りに見え透いた、汚い嘘であるのは自明であって、こんな嘘が通用すると思込んでいるところに、小沢といった政治家の卑しい本性が暴露されている。

小沢は、秘書が(自分が)無罪であると強調する、というのは、政治資金規制法などはたてまえにすぎず、そんなもので罪を問うことはできないし、検察も問うべきではない、と“信じて”いるからである。

政治家への企業献金は——それが仮に実際上のワイロであっても——、当然のこと、必要なことであって、それを取り締まること自体がおかしいのである。

そして政治資金規制法は、その陰に隠れて、政治家が企業献金を受け取る「形式」であり、企業献金に合法性の装いをこらすものであるから、それで罪を問うことはあってはならないのである。

“形式的に”いうなら、小沢は個人献金を受けとっているにすぎず、その背後に西松建設が仮にいたとしても、法律上は何の罪も犯していないのである。

つまり小沢は事実上、実際には企業からワイロをもらっていたが、しかし「形式的に」は個人献金として処理してきたから、罪に問われることはない、と開き直っているのである。

まさに、最低の、金権政治家の本性丸出しである。

「国策捜査」などと言いはって、“国民”の同情や共感が得られると思込んでいるところに、この政治家の無神経と下劣さがある。

しかも、世論の行く末をみて退陣するかどうかを決める、民主党が総選挙で勝てないと判断したら、民主党の代表を退くというに至っては、余りに愚昧と言うほかない。

労働者の意思は「世論調査」の結果などまずとも明白であって、こんな悪徳政治家、ワイロ政治家、ブルジョア的政治家など、ほんのわずかでも信用できないことは最初から明らかだったのである。

「世論」の動向を見るとか、総選挙の見通しを待つとかいった問題では全くないということ、あるいはすでに小沢では総選挙でさえも勝つ展望があやしくなっていることは、この瞬間においても容易に判断できることであって、それができないのは、小沢が、麻生と同じに、権力とカネと地位に執着し、それにしがみつこうとして、盲目になっているからであるにすぎない。

そして労働者があきれるのは、こんな最低の政治家を党のトップに、中心に押し上げてきた、民主党そのものの頹廢であり、荒廢である。

民主党の中では、小沢に対する公然たる反対の動きが出て来ないのは、この党が、いかにブルジョア的に墮落し、労働者的な感覚を全く失っているかを教えている。民主党が「小沢を頼ってきた」とか、小沢によってのみ、辛うじて統一してきたというなら、この党は実際上、まともな政党として、最初から存在して来なかったということ、ただ自民党に代わって権力の旨みにありつこうとする、卑しい政治家たち、烏合の衆の寄り集まりにすぎなかったということである。

こんな連中が権力の座についたとしても、一年と——いや、半年と——持たなかったと、我々は確信をもって言うことができる(すでに何回となく言ってきた)。

そもそも、捜査の進行状況を見るとか、そんな問題ではない。民主党は捜査の状況を見なければ、小沢問題の判断を下せないと言うこと自体がおかしいのである。小沢は当初、秘書は起訴されない、されたら自分の進退を明らかにすると喝破していたのではなかったか。捜査にかかわりなく、さっさと判断を下すべきであり、それができないなら、労働者は言うまでもないが、“国民”全体が民主党にあいそをつかさださうし、すでにつかし始めており、仮に小沢を切って、岡田などで総選挙を闘うにしても、もはや“国民”全体の民主党への不信は深刻なものになっていきかねないのである。民主党の安定した権力といったものはありえないであろう。

愚かしい民主党の連中は、小沢を辞めさせるにも、一番いい時というものがある、仮に小沢をすぐに辞めさせたら、自民党が総選挙をやるに一番いいときに麻生下ろしをやって来かねない、そうしたら総選挙で不利になる、などといった、つまらない思惑を口にしてている。語るにおちたとは、このことだ。問題はすでにそんなつまらない、小手先の“政治技術”のレベルをとっくに超えている、という簡単なことが、このちっぽけな連中には分からないのである。

小沢の政治生命の終わりは、民主党の政治生命の終わりでもあるし、またそうでなくてはならない。労働者はこのもう一つの反動政党、ブルジョア政党を乗り越えて前進して行くのである。



【主張】

教育をゆがめる者たち

幼・小一貫“教育”の荒誕

東京の品川区が、幼稚園から小学校にかけての「一貫教育」を行うという。理由として、小学校の一年生の教室での学習態度などが「小一プロブレム」として問題になっているように、崩れているから、といった理由をもっともらしく持ち出している。

「小一プロブレム」とは、一年生が教室で落ち着かず、その生活態度、学習態度が全くできていない、といったことである。

だから、幼稚園のうちに「集団生活のルール」や、これまでは小学校で教えてきた「簡単な読み書きや、計算などを統一的に教育」するのだ、という。

しかし、五、六歳の子供たちに、小学校でやるようなことを前もって“叩き込む”ことに、どんな意義があるというのか。「教育」の理念が分かっていない——というより、存在しない——というしかない。

幼稚園にまで「一貫教育」をおしつけ、子供たちをどこまで小さく、つまらない人間に育てようというのか。

流行の「一貫教育」といったものは単なる便宜主義であって(その根底にあるのは、この社会が競争と利潤のために動かされているところに、つまり個々人の行動原理、生活原理が個人主義、そして利己主義によって支配されているところにあるのだが)、教育の一般的な思想や深い原理とは何の関係もないのである。

そもそも、小学校が、つまりいくらでも本格的な教育が六歳から始まるのも、国民教育(近代教育)の長い歴史的経験から出てきたことであって、それは教育の段階が小学校、中学校、高校、大学と分かれていることと照応している(もちろん、この段階区別を絶対化しているわけではない)。

そしてこのそれぞれの段階は、子供たちが成人に、つまり社会的にみて、“一人前の”人間に成長していくあれこれの過程と諸段階に対応しているのもであって、決して便宜的なものではないし、あり得ない。

つまり、それぞれの段階に対応した教育があるのであって、ここでは単なる「一貫性」が問題になるのではない、むしろここでは、それぞれの段階性、特殊性が決定的に重要なのである。

もちろん、「一貫性」が問題ではない、というのではない、しかしそれは、段階に適応した教育の背後にあって、それを規定していれば十分なのである。

前の段階の「教育」が、後の段階の「教育」の前提となり、基礎となり、出発点となる、ということは当たり前のことであって、そんなことをいままさら声高に言う方がおかしいのである(いや、一貫教育を言う連中は、むしろこのことを否定するのだ、つまり「基礎」や「根底」になるのではなく、連続し、「一貫」しているのだと空文句を弄することによって)。

前の段階が根底になって、次の段階では、ある意味で、その段階の子供たちの成長にふさわしい「教育」があり得るのであって、一般的な「一貫性」など持ち出しても、大した意味はない。

区の教委は、「英才教育ではない、あくまで小学校の教育との円滑な接続を目的にしている、小学校の教科を取り入れたからといって、現行の制度に反するものではない」などと釈明しているが、こうした発言自身が、彼らのやろうとしていることが、「英才教育」であり、「制度に反するもの」であることを暴露しているのである。

そんなものが、このブルジョア社会では、単なる学校の(そして今では、幼稚園や、幼児のための私塾の)「予備校化」を正当化し、擁護する理屈にしかならない——実際にそうなっている——、という真実を我々は見ているのだ。

この四月、一年生になる我々の子供や孫たちも沢山いる。彼らは、彼女らは、喜びと期待に胸を膨らませて、学校の門をくぐろうとしている(これは中学や高校等々入学する子供たちも、みな基本的に同じであろう)。

胸が踊るというのは、幼稚園からの「一貫性」のためではなく、まさに質的に異なった新しいもの、すばらしいものがそこにあることを予感し、知っているからである。新入生に自覚させるべきは、このことであって、幼稚園の延長といったものではない(ところで、幼稚園と小学校の「一貫教育」とは、子供たちに小学校を、幼稚園のつまらない延長と理解させることではないのか、また、幼稚園での子供たちの自然な、豊かな成長を台無しにすることではないのか)。

品川区の、若月英夫といった、教育委員会の卑しい野心家ども、反動のごくつぶしたちが、自己の地位や権力のために、つまらないものを、子供たちに押しつけることに深い憤りを感じるのである、子供たちの、そして孫たちの喜びと期待を台無しにすることが許せないのである。

こうした愚昧な連中は、今や、高校を大学の、中学を高校の、小学校の中学の「予備校化」したのと同様に、今度は幼稚園までも、小学校の「予備校化」しようと、くだらない、そして有害な策動を始めたのである。まさに、ブルジョア教育の弊害と愚劣さと反動性は、ここに極まれり、と言うべきであろう。

こうしたものが積み重なって、「教育」を——つまり青少年少女の多くを、その未来を、その人生を——破壊して行くのであり、また実際に破壊してきたのである。

彼らは教育を掘り崩す自らの愚挙を、愛国主義教育などの強行を「教育改革」とか「教育正常化」とか呼び、また真実の教育、科学的な観点から出発する教育、全くの“正常な教育”を“偏向教育”などと呼んで恥じないのである。今こそ、ゆがんだ“偏向教育”——真実の意味での——を押しつけるブルジョアや反動たちに対する総反撃が開始されなくてはならないときである。

